第 22 回 「おばさんの帽子」

2008 年 3 月 28 日（金）掲載

帽子は本来、必需品だと思う。日よけ、防護、風雨よけ、そして年齢カモフラージュ用として、季節を問わず携帯するようになった。

特に、旅行に行くとき、わたしは帽子に野鳥のブローチをつけ、いつになく頭上に思い入れを感じて出かけるのだが・・・・どういうわけか、かならず帽子を失くして帰宅する。

3 年前は、JR山陰本線の車中網棚に置き忘れ、帽子はともかく、オオルリのブローチがあきらめきれなくて、益田駅から着払いで送ってもらった。その同じ帽子を、またしても山歩きの最中に失くしてしまい、こればかりは問い合わせ不可能なので、あきらめた。

帽子止めをしないなら、ちゃんと気をつければいいのだが、たとえば、目上の方にあいさつするとき、トイレで手を洗うとき、暑さでひたいをぬぐうとき、ちょっとした隙に帽子を脱いで、そのまま記憶がなくなるのだ。

しばらく無帽でいたが、冬に東北を旅することになって、また帽子を買った。旅の間中、車中でも自然探策でも寺社まわりでも、とにかく帽子をずっと見張っていたおかげで、帰りの新幹線の中で、「失くさずにすんだ」と自己満足にひたった・・・・のが、まちがいだった。東京駅の高速バスのチケット窓口で、どうやら帽子を脱いだらしく、バスに乗った自分は無帽だった。なにをか言わんやである。

くやしくて、また帽子を買った。そして、とうぶんかぶらずに、本棚の上にしっかり置いておくと夫に宣言した。こうしておけば、ぜったいに失くすことはない。

それじゃまるで、新品の傘をしまっておく佐野洋子さんの絵本〈おじさんのかさ〉みたいだと、夫に笑われた。ほんと、たしかに、帽子は失くならないだろうが・・・・やはり、なにかへん、だな。